音声言語による古態舞踊の研究

上林　澄雄

現代までに消えて失われた舞踊の類を≪古態舞踊≫と呼べば，その研究は〝舞踊の考古学〟と云えよう。考古学とは，埋没した遺跡から発掘された遺物を直接の研究対象として過去の文化を推定する科学だが；古態舞踊の研究も，同様に今は埋れた時代＝社会での舞踊を掘り出して，その実態・機能・意味構造の推定を志すからである。

しかしながら，有形の物体を資料とする考古学とは違い，文字記録以前 ── 先史時代および文字や舞踊譜による記録を欠く時代 ── の舞踊には，客観的な研究資料は絶無であり；物的な材料を欠く研究は，考古学とはなり得ないのではないか。

ところが文字に先立って，言語は存在していた。言語は個人の咨意を許さない公共の伝達媒体の客観性をもつ。舞踊の考古学の資料は，（有形の物体ではないが）確固たる客観的存在である≪音声言語≫だろう。この無形の遺跡を深く掘下げる学的方法さえ確立すれば，古態舞踊の研究は≪古態舞踊学≫として成立可能かと私は思う。

文献学を受けついだ古い言語学の語源研究は，衒学的な語呂合わせやコジツケに到ることが多かった。最近でも，その影響が残り，バレーの語源は旧約の偶像神バールからとか・マイムの語源はエジプトのミイラに始まるとかの神話的な空想を綱羅する迷著がある。（例：W.G・Raffe〝Dictionary of the Dance〟N. Y., 1964）。

現代の言語学は，形態音素論・音表象論と構造言語学の試みにより，大幅に進歩し；その成果は前文字社会の文化人類学に活用されている。その方法論を古態舞踊の研究に適用するのが，本論の目的である。

── その際の資料には，舞踊に関する語彙を凡ゆる言語圏から収集し，そこから帰納できる意義素（セマン）（テーム）の分類と構造連関との発見に当るのが理想であり，また将来の課題でもある。だが本論では，とりあえず語源研究が相当に明確な印欧語・漢語・日本語だけを研究資料とするに留めたい。

I　危機反応としての舞踊の起源

音声は文字に定着されて初めて客観的な資料となるが故に，文字以前の音声言語の研究は，文字言語の音韻論的研究にならざるを得ない。ところで，漢字の甲骨文はＢＣ12～11世紀，金石文は同9～6世紀に属し，同11世紀～ＡＤ３世紀の周秦漢の発音が推定可能であるから；ＢＣ11世紀頃に成立し同６世紀に文字化されたらしい印欧語よりも，古層の言語を残すものだろう。まず上古漢音から考察を始めるゆえんである。

1.　舞＝無：極限状況

舞の甲骨＝金石文の字形も発音*muiag（＊は推定音を示す，以下同様）も，ともに無（下線は漢字を示す）や蕪の原字と全く同一で少しの区別もない。これらに共通する原義を推定するために，上古漢音が軟口蓋音〔k/g/ŋ〕の相互交替によって意味の親近関係を保つ特徴を根拠にして，類音語を集めてみれば：

*mak音の莫・漠・膜・幕，*mag音の摸・暮，*mang 音の莽・盲・荒，*miang音の亡・芒・忘がある。すなわち否定や非存在の無・莫，消失の亡・芒・忘・盲，隠蔽の暮・幕・膜，日光や水や食用の動植物が不在の漠・莽・荒が示す≪あるべきものが見えない≫欠除の状態が，無と共通の表象だろう。莫の金石文は四方を草に囲まれた太陽の象形文字で，日を隠すまでに生い茂った草原を示す。芒・蕪・莽も同様の荒野。

してみれば，無の原義は，（後世の空無や虚無の抽象概念ではない）具象化された欠除・欠乏の表象像らしい。それは日没時の黄昏の不安感，茫茫漠々たる昿原と無人の原野と沙漠の空（むな）しさと威圧感を含む情動の投影で，いわば〈不毛と困窮の地帯，窮惑と絶望の領或，緊急非常の事態と危機状況との風景〉であろう。── 故に，上代漢音の複合母音（a, ia, uia）を音素／A／に集約・表記すれば，以上の語群の根底にある意義素（semantema）をもつ形態音素（morphophonema）は｛MA−K/G/NG：不在・欠除｝として表記・想定できる。

── 註記。本論を通じて，上古漢音の発音は藤堂明保『漢語語源辞典』（学燈社，1975版）による。ただし発音記号〔ə, ɔ〕はそれぞれe, oに改め，発音補助符号も除いた。本論の目的が個々の漢字発音の特殊性にはなく，一般化＝抽象化による意義素と形態音素の相互連関の研究にあるが故の処置に他ならぬ。

2. 無＝舞（武・撫）：危機の様式行動

無の想定上代音は，無だけでなく，武とも同一で区別がない。おまけに｛MA−K/G/NG｝をもつ語には，馬・驀・猛，模・慕・募，望・明・萌もある。

これらに共通する原義は≪見えぬ物を見ようと努める；あるべきものを探し求める≫だろう。

── 武は，（「戈を止む」の会意文字とされるが，これは後世の文治思想による道徳的解釈で，実は）歩武堂々の進軍が原意。馬は武や怒と等置（説文逸文・周礼目録）され，驀や猛も同義らしい。暗中模索の模や撫も，探求の動作。明と同一音の望の甲骨文は，見えぬ光を遥かに求める人の象形であり：明の形声の萌は猛と同一音で，暗中の圧迫に対する突出が原意である。

これら欠乏→充足，困苦→安楽，戦禍→勝利，暗黒→光明，無形→形，不在→在，無→有……の探求を綜合・還元すれば，上記の形態音素は改めて｛MA−K/G/NG＝欠除とその解決の探求｝と再規定せねばなるまい。

無と舞の同一視は，あるべからざる事態に直面して，あるべき平常状態の回復を求める行動が，直接の反射運動として生起するが故だろう。この行為の根源は，動物が緊急非常の極限状況下で示す危機反応の「儀式化行動（リチュアリゼーション）」で，人類の様式的身体運動の根元もまた同様だと私は思う。

動物の危機反応には①外界の対象に触発された対敵行動（agonistic behavior）と，②（発情期の異常なホルモン内分泌による体内異和感が起す）内面の情動から発現する婚前示威（求愛）行動とが代表する両面がある。それが上代漢音では①外敵に向う武・馬・驀・猛の類と，②求愛時の愛撫に似る撫や恋慕の慕の類とに相応する。後述の①外向的舞踊と②内向的舞踊の両極性が，そこに概念化されていると見てよかろう。

3. 舞＝巫：呪術儀礼

巫も舞＝無＝武と全くの同一音をもち，呪術による祭祀の主体を意味した。── 人類の早期社会では，非常時の対策に類感呪術による危機反応行動の再現を実演したが；巫者が防災求福の職能者になって後は，現在のみならず未来の危機予防の儀礼として，危機反応行動の様式化を更に進めた。その結果，本来は無意識の反射運動だった様式的運動は，意識的な演舞・作舞による形式性を増し，より舞踊化されてゆく。

その運動法は，①摸と撫が示す超自然的な危機の正体を抖擻（ふるいたく）して，不明な形状を手探りで求め，霊（神）意を慰撫する身振りの腕部運動；②武の直進や驀の走行・跳躍の脚部運動；③猛や荒の激しい体技；④回転運動を含んだであろう。

上代漢語の音声言語が示す舞＝無＝巫の等置は，人類の舞踊起源から，公演芸術の祖形である呪術儀礼 ── 発声器官を含む身体各部の様式運動による（音楽と演劇が歌舞に合体し，宗教と芸術が未分化の）古態芸能 ── に到るまでの過程を示す重要資料だろう。

4. マフ回転とクルフ自転

上代日本語はＢＣ３世紀頃に成立し，ＢＣ８世紀に文字化された。その舞踊に関する語彙のマヒの語根＊mafは，マハ（廻）ル・マハスの回転運動が原意で，梁塵秘抄の舞う物盡（づく）しの枚挙例が示すように，公転よりは自転が中心の回転を意味し，また舞踊の総称マヒを派生した。

マヒよりも古層の舞踊観念を，上代日本語の祖形を含む古代日本語に求めるには，非分節言語の残存物たり得る音表象語（phonesthema）── 擬声＝擬態語や幼児語の類 ── を考究する要があろう。その中にはクルクル・グルグル・コロコロ・ゴロゴロ・キリキリ・ギリギリ・クラクラ・グラグラ等の回転・横転・自転の反覆や持続とその結果を示す語群がある。故に形態音素｛K_V R_V：回転｝（K＝k，g；v＝a，i，u，o）が想定できる。

その中の＊kurが語根の語には，枢（とぼそ）クル（ル）の開閉時の自転反復や，糸車クルベキと車クルマの自転連続があり；語根は＊kur＝自転だったと思われる。

古事記の酒宴のマヒの描写にはクルホスとモトホスを対語とする用例がある。文脈から見てモトホス（語義は後述）は酒盃を順に送る巡還，または緩慢な周囲巡行の公転運動か徘徊で，クルホスは直立体軸回転の自転連続（後述）かと思う。

マヒが舞踊の総称となる上代文献の以前には，クルヒが舞踊の呼称だった事も考えられよう：中世では物狂いが大道芸人の歌舞になり，獅子のクルイが舞踊そのものを意味したのは，宮廷や上流人が棄てたクルヒの原義が民間に残った例証かもしれぬ。なおクルヒは狂気の激しい外向的様式運動のほか，「イノル，クルヒテモノイフ，又クチハシル」（新選字鏡）の祈禱・憑依・託言をも指していた。

Ⅱ　危機反応と古態芸能の成立

巫の甲骨文 と金石文 は，癸の甲骨文と金石文に似る。この癸について考えてみよう。

1. 巫舞と回転表象

癸は刃が四方に出た予とも三鋒予とも説かれるが，原義は十干の最終数ミヅノトであり；向日葵が原義の葵および両脚器が原義の揆の双方の原字である。── 葵は日輪を追うて廻り，揆は円を描く用具の分廻し，癸は十干の到着点が出発点に移る一周循還を示すが故に，みな回転運動に関連があるようだ。

① 癸の回転

いま癸の上代音＊kiuerと葵＝揆＊giuerの同音と類音を集めて見れば：関節部の回転を可能にする関節窠の象形である骨の原字，潤滑されて円滑な回転が原意の滑，回転の象形が原字の回に；グルグル掻廻すのが原意の混，腕部回転が原意の揆・揮，循還周行が原意の癸・帰・運・旬，グルリ取巻き包む圍，戦車の包囲円陣が原意の軍や日を囲む輪の量がある。── 上代漢音の声母の牙音〔k, g〕と喉音〔h〕の互換性と・韻尾の歯茎音〔t, r, n〕の互換性により，形態音素｛K/G/H－UE－T/R/N：回転（円運動・円形）｝（UE＝ue, iue）が想定できる。

② 回転の形態音素群

上記の音素の声母子音と互換性をもつ軟口蓋音〔ŋ〕を含む類縁音素｛H/NG－UA－R/N｝（UA＝ua, iua）は，上記の回と同じ渦巻の指事である亘と形声である渦と・関節窠の骨と同義の窠のほか；渦巻く殻の蝸，円運動反復の巻・捲，円形の圓・圈・環，縁の丸い冠・椀・管；丸い握り拳が原義の拳，樹上の球形の果実を描く果の原字を含む。── 故にこれら回転の形態音素の結合から，形態音素群｛声門音（H）／軟口蓋音（K/G/NG）－U－A/E －R/N/T：回転（円形・球形・渦線・螺状｝が想定できる。

③ 化の変転

この形態音素群中の｛H/NG－U－A/E －R/T/N｝をもつ語には，連続自転者が必ず体験する平衡感覚の異状と喪失に基づく眩暈の眩および卆倒の指事である匕（化の原字）があり，また生者が仆れて死者になる変化の化，死霊の朦朧たる幽冥界の暗い玄，宙吊りの物が廻って方向を換え続ける不安定な懸垂の縣，変幻常ならぬ幻；一者が他者に代る換に作為による変転の為と偽瞞の偽，眩感・瞞着の手段が原義の囮がある。── 故に形態音素｛H/NG－U－A/E －R/T/N：（回転）変転，超現実，偽瞞｝が想定できる。

④ 癸＝鬼：変転と超自然物の現前

回転運動が原表象である癸（Ⅱ1①参照）と同一音＊kiuerの鬼は，「庶人の亡霊」（礼記・祭法）と「先祖を祭る」（広雅・釈天）が原義で，類音＊kuerの怪は鬼の怪偉が原義らしい。さらに化・玄が眩・幻・偽に加えて，こじつける牽強付会の牽，嘘をつく譌をも同一形態音素（Ⅱ1③）の語群中に共有するので，回転→変転→鬼や怪の現前は同一の原表象からの派出観会であろう。巫と言の形声である誣告の誣が生れた所以である。

してみれば，巫舞と回転表象には本質的な連関があると結論せざるを得ない。── 本章（Ⅱ）冒頭に示した巫の金石文が癸の甲骨文を45度傾けた同形であるのも，巫を代表する表象が回転運動なるが故であろう。── 貝塚茂樹は巫を糸巻を両手に持つ姿と説いたが，巫の甲骨文の手の象形2個は（両手でなく）手に持つという抽象概念＝所持の指事で，金石文の2個の工も工の回転の指事だろう。工を糸巻と見た貝塚説は，現実の糸巻の象形が同時に回転一般（抽象概念）を示す指事である事を見落している。私見では，工は枠の象形で，糸巻・糸車・紡錐・苧環の類が回転と舞踊の合蓄をもち，新石器時代以降の言語における舞踊概念の重要な語彙を占めてきたものである。（拙論『舞いの原型』芸能1976年4月号参照）。巫の甲骨文は糸巻を両手に持つ巫ではなく，回転運動の代表者を示すと私は思う。

2. 変身：巫舞と古態芸能

危機の解消と予防が目的の呪術儀礼から古態芸能が生れたのは既述（Ⅰ3）したが，両者の共通原理は演者の変身である。── 変身とは一者が他者になる変化で；その認識には自我が他我に移る人格転換の意識が前提になる。これは更に驚愕その他の危機反応における日常の自意識の断絶，および異常な意識下にある自己の体験を原点とする。故に危機の様式行動を再現＝再演する呪術儀礼の主体もまた，この意識の異常を再体験するべく努めたいに違いなかろう。

① 意識の異常の実現

人為的な意識の異常は，過労や自傷による苦痛，精神集中その他の手段で惹起されるが；最古層の巫者は，急激な体位変化，反復運動の継続，音響や歌舞の連続刺激を採用しただろう。その結果として起る意識の障害には，まず意識の狭窄，ついで⒜意識の暗化，⒝混濁，⒞変転がある。

⒜意識の暗化は，眩暈→昏眠→昏睡と進む昏迷の昏蒙状態で，虚脱・失神から人事不省の仮死状態にも到る。── その眩暈を上代漢音の眩・暈が，昏蒙状態は暗澹たる玄や茫漠たる無明の心象風景である無・莫が，気絶・卒倒の仮死状態は化が，それぞれ示した。

上代日本語では，クルフの語根＊kurをもつクラ（暗・眩）ム・クレ（暮）・クラ（暗）シ・クロ（黒）は勿論，｛KvRv｝（Ⅰ4参照）をもつクラクラの眩暈，グラグラの動揺・震撼，ゴロゴロの横転からの派生したゴロリと倒れ伏す卒倒ま

でが，同様の例である。

ⓑ意識の混沌は譫妄（夢幻）状態と精神錯乱で，不安・困惑・亢奮と幻覚や妄想を伴なう。── 上代漢音の回転の形態音素群（Ⅱ１①～③）には，既掲の混濁の渾と幻視の幻のほかに，困惑の困・窘が含まれている。

上代日本語では，クルフが譫妄時の発言を指す託言および精神錯乱の狂気（14参照）を指し，その形態音素｛KvRv｝をもつキリキリ痛む緊張のクル（苦）シさの困惑も，同様。

ⓒ意識の転換は朦朧状態と精神分離を含む。巫術では意識の狭窄と暗化を伴ない，混濁度の浅い朦朧状態のトランスでの幻想，および半意識または無意識の精神分離による一時的な多重人格を呈する人格転換を主とする。── これが前述の上代漢語の化・換・幻・偽が示す所（Ⅱ１③）。上代日本語では，クルフが憑依による人格転換を・同根のクラマスが虚偽瞞着を指し；その形態音素をもつ派生語ガラリが瞬間的変転を云うのも同例。

②　印欧語が示す古態芸能の変身

ディオニソス祭での女性群舞の名はギ（ギリシア語）turbasiaだが，そのIEr（印欧語語根）*tur＝回転。その踊り手はmainades（狂女群）と呼ばれ，同根のmaniaは狂気，manteia は神託を指す。ラ（ラテン語）turbo は旋風・竜巻から独楽（こま）までの全ての高速自転を指すが，turba は不安・困惑・窮迫・狂騒・狂喚を，turbare は撹拌・混乱・驚愕・狂乱を含む。これも同根のェ（英語）turnは回転・変転，変化を指す。さらに：サ（梵語）の動詞（梵語動詞は三人称単数形で示す）vá-late, vártate は回転，IEr は＊u/w/u-er ＝回転らしい。同根のラvortex（渦巻・旋風）とvertigo（眩暈）のほかに，ド（ドイツ語）werden は生長と変化を指す。同根・同義のOE（古代英語）weorthanからのェweirdは玄と同じ超自然性が語義。またgiddy（眩暈）の語源は，OE gydig（狂気）〉gyden（女神）〉＊gyd（神）まで遡れる。ギenthousiasmos（熱狂）の語源は，神懸り（en theos）の憑依。

このように舞踊と回転→変転→変身の語義連関は，上代語に一般的かと思われる。危機反応行動が，呪術儀礼をへて古態芸能を成立させた結果であろう。── 古典邦舞では，人格転換を示す時に全回転を一回行う。また演劇と舞踊の公演芸術の演者が，洋の東西を問わず今なお化粧と衣裳の扮装を用いるのも，太古以来の変身の伝統を残すものであろう。

Ⅲ　古態舞踊の変遷

以上の考察はシナと日本の上代文献を根拠とした。両者は政治＝宗教的権威の下に位した書記が記録したものなので，舞に対する踊，マヒ（儛）に対するヲドリ（舞）を軽視し，官廷の儀礼舞踊を一般人の即興舞踊や地方民の娯楽や伝承に即した民俗舞踊よりも重視した。ここに改めて上代以降の古語に重点を移し，古態舞踊の一般的全貌の通時的（ディアクロニカ）な展望を試みる所以である。

1.　外向的舞踊：クルヒ

動物の危機反応の延長である様式的身体運動は５～２百万年以前の類人以来続いたが，これが舞踊として概念化される迄は永い。

舞踊の最初の認識と呼称は，微妙な内向的舞踊よりも目立つ・急激で強烈な外向的舞踊に向けられただろう。中でもマレーの傷害狂（プモック）や北欧伝説の狂戦士（ベルセルク）が示す運動暴発に到る対敵行動の狂騒狂乱は，後代にturbasia（Ⅱ②参照）やクルヒ（Ⅰ４）として舞踊概念に到る以前の祖形に近いものだろう。

①　フリの腕部運動

類人猿は首位争いの示威行動で樹枝を振廻すが；フ（振）ルの持続反復形フルフの古義は，神秘な活力の触発・喚起・表現で，全能力の集中発揮と顕示およびフルイイヅ神懸りだった。気がフル狂気や目立つ動作のフルマヒの語根＊furは，激しい腕部運動の原義からフリの様式運動→演技法→舞踊法→歪み＝クルヒや虚偽の外観を装うの語義を得た。

緊急非常時の衝撃や亢奮による動揺と戦慄の身震いや振動は，サ vépate（亢奮・震動）のIEr＊u/w/u-i-b/p＝振動からは，ラuibrareの震う・振廻す・投擲・疾走や，MD（中世オランダ語）wippen（振廻す）とwip（鞭）に，MHG（中世高地ドイツ語）wifenの振動・回転・旋捲などが派生した。

バレーのIErはサ balbalīti（回転）の＊bal＝回転・舞踊で，ギballeinは踊る・投げるの両義をもち；IEr＊u/w/u-er＝ 回転（Ⅱ２③）からのMHGwerfenも投擲を指す。── 樹枝を振廻す猿の示威フルヒは，腕部運動からの舞踊語源の原表象であろう。

②　ヲドリの跳躍と走行

手で投げる投擲は身を投げる跳躍に結びつく。ラsaltāre（踊る）はsalīre（跳躍前進）の反復形で，exsultāre は踊躍歓喜。そのr＊sal＝走り跳びはフ（フランス語）sallir（出撃・突撃）やOF（古代フランス語）asalir（強襲）を生んだ。

ホトハシルのホトは，ホトホト（殆）の接近やホトホトシの危難や，ホトホル発熱・憤怒や，ひたむき専一のヒタ←ヒトツに関係し，情意の噴出と走行跳躍を指し，書紀に踊躍と記された。ヲドルの語源もホトホル→＊ホドヲル→ヲドルかもしれ

ない。

ダンスの語源は，ＯＨＧ（古代高地ドイツ語）dansōn＝手足の伸張か，ＶＬ（中世ラテン語）de-antiāre ＝前進らしい。前者はＩＥｒ＊t-e/a-n＝緊張からのドtanzenに関連し，緊張度の強い腕部運動を含む外向的舞踊を指す。後者ならば：

③　対敵行動からの前進舞踊

に結びつく。── 椿事勃発時にアイヌが行った縦隊行進の歌舞は，「変事を脅す，威嚇・いがみ合い；掛声で追払う，歯をむき出し唸る；力足を踏鳴らす，地田駄・踊躍」を意味する呼称をもち，これが外向的舞踊が危機反応の対敵行動からの延長である事を例証する。

④　体技舞踊の起源

以上の外向的舞踊は，のちに遊戯や即興舞踊をへて，狩猟の成功や戦闘の勝利を祈る呪術儀礼から戦技舞踊に到る迄の間に，概念化されただろう。呪術は超自然界の認識が前提で，それは葬礼法の成立以後だろうから，埋葬法や熊の頭骨陳列を始めた約15～３万年前のネアンデルタール人の出現後に，動物模擬や模擬戦の舞踊を含む体技舞踊の原型が成立したと考えられよう。

2.　内向的舞踊：モトホル

危機反応の根元には，日常動作が不可能な異常事態に適応する行動が選べず，行動法の分裂・動揺・不安定を表出する行為があるだろう。これを**ⓐ対敵行為**で見れば：前進攻撃と後退敗走の両行為が同時に共存する不均衡な心理を表出する威嚇行動が，それ。**ⓑ婚前行動**でも，攻撃＝征服の対敵行動と抱擁・合体を志す愛撫作動との反対感情併存のジレンマが常に表出されている。

①　探索：マグ・カナヅ・手踊り

危機の原因が内面の情意に・またはその投射＝対象化である超自然物にありと信じられた場合の様式運動は，運動量の減少と移動範囲の縮小を伴ない，不可視の対象をマサグル緩慢なものとなる。即ち外向的なフルフが肩から先の腕全体の振廻しや投げる動作を行うのに対し，肘から先の・特に手首から先と指が主導する運動様式をとる。無に有を求める舞が摸・撫の動作を含んだように，後代に舞踊の意味を担う語には緩慢な腕部運動を指したものが多い。

マ（覓）グ探求の語根＊ma-g/kをもつマ（巻）クの重複回転，マ（巻）グの曲線化，マガ(紛)フ・マギルの類似と混乱，マギ（眩）ラハシの昏迷，マギラハスの粉飾と偽瞞は，みな古代の舞踊概念の成素を含む。ｴsearch（捜索）の語源はＬＬ（後期ラテン語）circāre（円周移動）＞ﾗcircus（円）＞IEr＊ker＝回転に遡る。

さらに手先の波状運動のＯＥ waifanは，ＩＥｒ＊u/w/u-i-b/p＝振動（Ⅲ１①）から出て，タヒロカス飄掌（書紀）に近い。これはマヒ動作を云うカナ（秦）ヅをカ（掻）キナ（撫）ヅと見れば，舞の撫・摸・慕と同様の呼称になろう。

邦舞では手踊りが重要な中心だが，インドのムドラやギリシアのkheironomia（手形法）のほか，手の動きが中世の旅芸人（ヨクラトール）や吟遊詩人（ミネゼンガー）の芸の中心だった事が当時の古文書に記されている。

②　タモトホル徘徊とモトホル巡回

タモトホルは内向的で緩慢なモトホルだろう。モトホルはマト（纒）フ・マトハスやマツハ（纒・絡）ル・マツハスの蔓絡・纒繞，ツキマトフ付着，マトメル要約・統一の語根＊m-a/o-t-o/uを共有し，接近持続の逡巡・徘徊を指す。── だがモトホルの語根がマト（円）・マドカ・マドヰ（円居）の＊ma-t/d-oならば，上記の纒繞は囲繞・周囲巡行に移る。またモト（立つ物の根元，根幹・基本）が語源ならば，神秘な原因の内奥にある基底の本質をモト（求）める探索は，不可解な対象や聖なる物体やモト（立木の付け根）を巡る求心的な円周運動に移る。モトホルの他動詞形モトホスが物を巡繰りに手渡す動作とともに，畏怖と尊敬の対象である宗教的聖物を巡る公転舞踊として成立するのは，約10～３万年前に生れた呪術＝宗教の儀礼出現以後であろう。

③　公転舞踊の起源：コロス

以上の内向的様式運動の運動量減少は，モトホス公転が舞踊の場＝運動範囲を局限し，舞踊空間の平面を限定し，舞踊場を成立（あき）させるに到る。もとは舞踊場としての森林内の空地や聖木の周辺や部落の広場の呼称らしいｷkhorosが，後に舞台から歌舞群とその合唱や舞踊まで語義を拡張したように，群衆の公転運動は最初の舞踊概念成立に関連したと思われる。その祖形語は，成人式の儀礼や宗教的祭祀の疵跡を残す約３～２万年前のオーリニャ７期まで遡り得るかもしれぬ。

④　円陣舞踊の起源

最初の舞踊形式の呼称は公転舞踊名だったらしい：ｴround, roundel, roundelay, ﾌronde, rondel,ｲ（イタリア語）rondoはみなﾗrondus(円)が語源で；ﾄRádel,ｽ（スペイン語）ruedaはﾗrota（車輪）＞ｻrathas（車，戦車）から。

── 群舞の古書画の記録と現存の民俗舞踊に見られるアイヌのrimse（歌舞），ｷkhoros,ｴcarol, ﾄReigen, 東欧各国のkolo,horaは，みな輪舞を本来の形式とする舞踊名の例である。

公転舞踊の起源は，動けぬ猛獣の獲物や見かけぬ怪奇な物体を前にしての，恐怖による逃避と好奇心からの接近との反対感情併存を表出する逡巡徘回の行動が，さらに様式化された巡回運動だろう：それは好奇の求心力と恐怖の遠心力とが,互いに中和されて均衡を保つ距離を半径とする円運動に

他ならないからである。

してみれば円陣舞踊は，円の中心に位置する対象が起す恐怖と反撥感情に，知的探求心に伴なう関心・興味・魅惑の情意が結合し，そこから聖の観念 ── 畏怖と尊敬，嫌悪と愛慕，呪詛と崇拝の一致 ── が生れた時に始まる。それはネアンデルタール人よりは多人数の半定住的な共同社会をもつに至った約４～１万年前のクロ＝マニョン人の儀礼以後の起源であろう。

3. 火：キリの自転

人類の火の使用は10万年以前にも痕跡を残すらしいが，火食と発火法は約４万年前以来らしい。ヒ（桧）の板穴にヒキリキネを挿入回転するヒキリのキリ（錐）の急速自転反復は，キリキリマヒの表象祖形であり得よう。前述の非分節言語の｛KvRv ：回転｝の語根＊kirの祖形も，また(上代以前の）古代日本語にあっただろう。キリキリ捲いて固く締める，頭髪のギリギリ（つむじ）の渦などは，それから派生したものだろう。

上代漢語の｛K/H−UE−R/T/N＝穴・凹む｝が穴・窟・掘を，｛K−UA−T/R/D＝えぐる｝が抉・鈌や武器の戈・鉞にキ（切）ル決，跳上る蹶起の蹶・越，一年の越暦循還の歳など，跳躍・巡回の語を含むのは，どちらも前出の回転の形態音素群｛声門音／軟口蓋音−U−A/E−R/N/T｝（Ⅱ１②）に下属する形態音素であるが故である。

印欧語でも，ェturn（回転・変化）がIEr＊t-ur＝回転（Ⅱ２②）または＊ter＝擦るからの派生とされ；drill（錐）はIEr＊u/w/u−i−b/p＝震動・振廻す（Ⅲ１①）からの派生語である。

威力・効力ともに絶大で貴重な火を生む動作が，発火の促進や成功のみならず，除災求福の呪術として模擬再現され，やがて火の崇拝儀礼の司祭者の自転舞踊に到ったとも思われる。

4. 棒：回転と武器

直立自転者は回転軸となった自我の胴体の垂直性を感得する。ラuertex（渦巻）がＬＬuertica-lis（垂直）を派生した所以。

上代漢語の｛T/D−E−K/G/NG：真直｝は直立進入する釘の原字丁や打に挺立の挺，直進の之・志に正の原字の征と急征直進者の逞，直立不動の止・侍・峙，真直な支・技・肢に杭の杙，そして牡牛や種牛と独身男子を指す特を含む。

体軸自転に樹技→木の棒の挺や杙→打っ突くに到る原始的な武器の語義が関連し，木の棒が男性の勃起陽根の肉の棒を含蓄するのは，男性の攻撃性の顕示を一機能とする外向的舞踊の前段階を示す。棒を振り・突き・投げる狩猟や戦闘を模倣する武技から，やがて戦舞や棒踊りが成立する。 ── これらの外向的舞踊の成立は，槍や弓矢を使う大規模な集団協同作業の狩猟を可能にした言語の発達，〝指揮棒〟と呼ばれた用途不明の男根形石器や骨製・角製の錐，動物の交尾を描く岩窟壁画や妊娠女性の彫像を伴なう（農耕時代以前の）初期豊饒儀礼の成立を見た約４～１万年前以来のことだろう。

（以上で約１万年以前に遡り得る舞踊の萌芽の考察を終る。以後の特に土器製作・紡織・牧蓄・農耕車輪と金属器の使用が始まる新石器時代からは，舞踊の関連語は急激に増大するのであるが；古態舞踊は旧石器時代に祖形の大半を示すが故に，ここで一先ず筆を擱く。）